

島々を訪ねて

公益社団法人鹿児島県看護協会 会長 田畑千穂子

1. はじめに

2020～2021年は新興感染症（新型コロナウイルス感染症）による世界的なパンデミックは、一人一人に新たな様式が求められ、政策的には新興感染症の公衆衛生の抜本的な見直しと保健師の倍増、施設においては基本的な感染管理対策の強化とともに、施設管理者の危機管理体制が問われました。今、3回目のワクチン接種の推進とともに第6波への備えが求められています。

鹿児島県は、有人離島を多く抱え、コロナ禍の地域・離島の医療を守るとは、医療に携わる者の使命であり、多くの医療者の願いでもあると考え、今回、本会の活動とともに、個人的な感動も含めて離島への関わりをまとめました。

2. 喜界島・大島（瀬戸内町・宇検村・大和村）を訪ねて

本会は5年前より、日本看護協会の組織強化事業と協働して、離島へき地の施設を訪問しながら会員増を図ってきました。今年は、新型コロナウイルス感染症対策で大変だった喜界島と、宇検村・大和村を訪問先に決めました。一カ月前からの日程調整でしたが、奄美大島では常任理事の林恵子氏と合流するという、ちょっとハードで楽しみな計画でした。2021年10月25～26日に組織強化事業として、喜界島、奄美大島（名瀬市、瀬戸内町、宇検村、大和村）を訪ねました。

1) 初めての喜界島！

1日目（10月25日）は風雨が強く条件付きで喜界島へ飛びました。無事に喜界島空港に

着陸しました時はホッとしました。

一番目に、喜界島町役場の統括保健師を訪ね、新型コロナウイルス感染症の第5波への対応を伺い、第6波に向けては宿泊療養施設を検討中とのことでした。ちょうど、私が10月上旬に与論島を訪ねた時に、宿泊療養所を見学した写真がスマホ内にあり、健康確認が行われたベランダや弁当をつるしたフックの工夫など紹介いたしました。保健師の「看護師の待機場所は？」との質問にも、管理棟が横に設置されていたことなど伝えることもできました。

また、看護師確保の問題では、喜界島内の潜在看護師は「ゼロ」で看護師の資格を持つ全ての方が、病院や施設等に勤務されていました。全島民へのワクチン接種は、パート等で働く看護師の午前や午後の勤務に合わせたスケジュールで進められていました。医療資源の乏しい島だからこそ、島民の総力でコロナ危機を乗り越えられたのだと頭が下がりました。

二番目には、喜界島徳洲会病院を訪問し、看護部長の徳丸順子さんや7人の看護部長さんらと意見交換会ができました。病院の看護師確保では、県内（鹿児島市、大隅鹿屋）だけでなく、長崎県、福岡県からも看護師派遣支援があり、潤沢な防護服の確保等、基幹病院の強さが十分に発揮されていました。また、在宅を担う訪問看護師は、島民の多くが自宅待機となった時期、すべての利用者に個人防護服装着（フルPPE）で訪問し、玄関での防護服の着脱には時間を要し、厳しい暑さの中、多くの看護師達が体重を落としていたと。

第5波の喜界島クラスターでは、喜界島徳

洲会が中心的な役割を果たせられ、その活躍に心から敬意を表すとともに、現場を訪ねたからこそ、知り得たことも多くありました。改めて現場の声を聴くことの大切さを痛感しました。

2) 二つの俊寛

私事ではありますが、今回、喜界島を訪れて、俊寛が流された鬼界ヶ島の場所については、喜界島、三島村の硫黄島、長崎市の伊王島など諸説あることを初めて知りました。

一つの俊寛は、喜界島総合グラウンド隣にある俊寛の墓としての「俊寛僧」です(写真1)。喜界町のホームページには「平家転覆の陰謀が暴露し、喜界島に流罪された俊寛僧は、赦免されることなく、この地に滅びました。島の人々や観光客の供える花や線香は絶えません」と紹介されています。喜界島の俊寛僧は物事を見据え、堂々とした姿に見えました。

もう一つの俊寛は、三島村歌舞伎としても有名ですが、硫黄島へき地診療所の前にある「俊寛像」です。私が20代の若かりし頃、鹿児島大学病院から特定検診で硫黄島を訪れた時に出会いました。海に向かって右手をかざし別れを惜しむ姿が印象深く、俊寛は硫黄島で亡くなったと思っておりました。喜界島の俊寛僧を眺めながら、硫黄島の俊寛像とも重なり、そして、第18代中村勘三郎が病氣から

回復し2011年10月25日に見た鹿児島大歌舞伎「俊寛」を懐かしく思い出しました。

3) 宇検村でパンク事件

不幸中の幸いを味わったのが、宇検村の深い山奥でのレンタカーパンク事件でした。

宇検村から大和村に向かう途中で、路面に大きな窪みがあって、レンタカー(車種はアクア)の左前タイヤが「ガッタン」と衝撃を受けました。その時はまさかパンクしているとは予想だにせず、青い海と山々を心から楽しんでおりました(写真2)。タイヤの空気はジワジワと抜けていったと思われ、大和村役場までの30分間は普通に走行でき、異常を感じることはありませんでした。

大和村役場に到着し、村長の伊集院幼氏にもご挨拶させて頂き、保健師の活躍や看護職確保のことなど話題が広がりました。あっという間の1時間を過ごし、帰路に就こうと発車した時「ガツン、ガツン」と異常音が聞こえ、車体も傾いてました。「え?」「まさか?」「パンク?」と、慌てて車を飛び出すと、人生初めて経験する「タイヤのパンク」でした。一瞬、飛行機の時刻に間に合わないなど、最悪状態が頭を過りました。溜息混じりに、周りを見渡すと、何とラッキーなことに、役場の横にガソリンスタンドがありました。ガタガタと大きな音を立てながら、ガソリンスタ



写真1 俊寛僧(喜界島)



写真2 宇検村にて

ンドに避難するように車を着けると、30代男性職員が気の毒そうな表情で近寄り「パンクですね、スペヤタイヤがありますか?」「今、店にはスペヤタイヤはないんですよ・・・」と。再び重たい気持ちに落ち込みながらも、レンター会社に連絡すると、スペヤタイヤの搭載場所を確認でき、素早い対応でタイヤが交換できました。

最後の訪問予定の県立大島病院の看護部の皆様には、事情をご理解頂き、訪問をキャンセルさせて頂きました。大島の施設訪問は、話題にも、記憶にも残る旅となり、様々なリスクへの備えと、ゆとりある計画の重要性を再認識しました。

3. 十島村ワクチンプロジェクトにメッセンジャーナースとして参加して

1) 参加のきっかけ

昨年の4月、十島村ワクチンプロジェクトに関わることができました(写真3)。

このプロジェクト(以降はPGと略す)は、十島フェリーを2泊3日で特別運航し、7つの島(口之島、中之島、諏訪之瀬島、平島、悪石島、子宝島、宝島)を回るもので、看護師の確保の厳しさから、協力要請を受けました。

また、国の直接的な支援もあって実現したもので、森山裕元国会対策委員長からも「十

島村の全島民へのワクチン接種へ、鹿児島県看護協会に看護師確保をお願いしたい」と依頼がありました。

十島村の保健師やへき地診療所の看護師の皆様とは、離島看護に関する研究のフィールドを通し、2014年より交流を持たせて頂いております。

2) フリーランスのメッセンジャーナースの協力

開業ナースの一つとして、メッセンジャーナースでフリーランスの看護師の存在があります。ナースセンターへの協力要請から2~3日で、4人のメッセンジャーナースの協力を得ることができました。十島村役場の方々は、早い段階で看護師確保ができたことに驚かれ、「十島村にこそ、メッセンジャーナースが必要だね」と言葉を頂きました。私は2011年に鹿児島県で一人目のメッセンジャーナースで、10年目を迎えています。

2021年11月現在、鹿児島県のメッセンジャーナースは17人となり、2022年2月の3回目のワクチン接種に向けても、既に協力要請に応え、メッセンジャーナースの5人が決定しております。

3) メッセンジャーナースとは

メッセンジャーナースをわかりやすく説明



写真3 宝島にて

すると「予防や発症の場面からずっと患者に寄り添い、中立的な立場で医療の担い手（医師）と受け手（患者）の懸け橋となる、かかりつけ看護師」と言えます。メッセンジャーナースは、医療の受け手（患者）が自分らしい生活を全うする治療や生き方を選択する際に、心理的内面にある葛藤を認め、認識のズレを正す対話を重視する懸け橋となることを目指しています。地域で医療的なことに不安を感じている方、一人で暮らすことが心配な方、あるいは近くに住むことができずに迷っているご家族などからの相談や要望を受けて活動します。

メッセンジャーナースの誕生は、2010年にメッセンジャーナース認定協会が設立された時に始まります。創設者は2011年にフローレンス・ナイチンゲール記章を受章した村松静子先生（在宅看護研究センターLLP代表）で、主体的な医療の実現に向け、医療の担い手・受け手双方の懸け橋となるべく、2010年10月に当協会を設立されました。看護師経験10年以上、かつメッセンジャーナース認定協会が主催する研修を受講することで、メッセンジャーナースとして認定される仕組みになっています。2021年10月現在、全国35都道府県に175人のメッセンジャーナースが活動しています。

4) 諏訪之瀬島のメッセンジャーナースを応援！

諏訪之瀬島へき地診療所に勤務の伊藤千香子さんもメッセンジャーナースの一人です（写真4中央）。

この十島村ワクチン接種PGへの参加は、メッセンジャーナースの仲間でもある伊藤千香子さんの応援であり、十島村のすべての島を廻るという夢のような船旅でもありました。

伊藤千香子さんは、十島村のへき地診療所に16年勤務され、メッセンジャーナースとなり「こんなにも“看護がしたい”という自分とその仲間を大切にしたい」と、話されていました。

また、十島村のへき地診療所の看護師達は、ワクチン会場となる各島の体育館の準備や島民への説明、ワクチン接種後の健康観察等のマニュアルを何度も見直し、事前の打ち合わせも念入りに行っていました。PGが成功した鍵は、保健師と看護師達の連携と、様々な事態を想定した準備であったとされています。

4. これからの離島医療支援とメッセンジャーナース

鹿児島県は南北600kmで有人離島26抱える地理的特性を有し、医療の現場は今後もますます高度化・複雑化してきます。2025年問題、2040年問題を見据え、病院で働く若い世代の看護師たちだけでは担えない部分を、生涯現役の中でやりがい感を持って、誰かが担っていくことが求められています。

医療の受け手が『納得』して治療を受けられるようケアすることは、看護師の大切な責務でもあります。離島医療はいくつもの課題を抱えており、医療の担い手と受け手の懸け橋になる人材が必要となります。その懸け橋となっていくメッセンジャーナースの存在は重要です。これからも、メッセンジャーナースの活動の周知や人材育成等に携わっていただければ幸いです。



写真4 かがしまメッセンジャーナース会の5人
（岩切・田畑・伊藤・高祖・田淵）